



6年前、結婚式のため奥さんと
イランに帰郷し、古都シラズを訪れた



休日には3歳の息子をつれ
ドライブをよくする。
長野県の湖畔で



トラクターやリフトを
使って自分も作業に
くかわることは
めずらしくない



メヘラバンさんたちの車解体工場の一部



(左から)仕事仲間のレザーさん、
メヘラバンさん、友人のエサンさん

外国人 と生きる

地方と世界の橋渡し役をになって —イラン人大量入国のその後—

庄司 博史 (しょうじひろし)

本館民族社会研究部

イラン人の行方

もう一五年以上も前のことになる。当時の新聞は関東各地で日曜になると公園などに集まるイラン人のニュースであふれていた。突如あらわれた、それもほとんどなじみのなかったイラン人の到来に人びとはとまどい、驚きの目をもってうけとめた。外国人へのさまざまなうわさや偏見が行きかたつたのもそこだった。景気はすでに停滞期に入りはじめていたが、肉体労働でも確実に現金がかせげるといいうわさで、短期の日本滞在にはビザが不要であったパキスタンやイランから人びとが大挙しておしよせていた。

今考えると、当時が最近日本で話題にたつてい本格的な多民族化のはじまりであった。その後、外国人の話題は、ブラジルなど南米からの日系人、急増する中国人や韓国人に集中し、公園に集まるイラン人の話は聞かなくなった。実際、一九九二年の相互ビザ協定の見直しの結果、日本へのイラン人の入国やビザの延長は困難になったため、かつての七万人は、一万人台に激減したといわれている。その後、イラン人が違法電話カード販売などでニュースととさおりながれることはあったが、日本に残ったイラン人の話はあまり聞くことはない。彼らは今、どこにいるのだろうか。

友人に助けられて

メヘラバンさんもじつはそのような十

数年前来日したイラン人の一人だった。京都市南部の国道沿いに車の解体工場の集まる一角がある。周囲には田園風景も広がり、むかしながらの村落も残る。メヘラバンさんはイラン人の友人レザーさんとともに、ここで倉庫の一部をかり、車の解体と解体部品の輸出業にたずさわって七年になる。扱うのは廃車された外車を中心で、イランを除く中近東の国々がおもな輸出相手である。普段は車の解体とともに、ケータイ片手に車で商談やオークションにかけまわっている。もちろん用いるのは流暢な大阪弁の商いのことは、同業者のパキスタン人たちとも日本語でやりとりをすることが多い。経営規模の拡大などという構想はない。儲かっているわけではないが、やれるだけ続けていくという。ニッチ(すき間)産業ではあっても零細企業であることには変わりない。イランで自動車工だった当時三三歳のメヘラバンさんが来日したのは一五年前、観光ビザだった。ビザが切れても建築現場をわたりあるき、重労働もやってきた。しかし、若かっただけで、苦しかったという思いはあまりない。イラン人の友人が大勢まわりいて助けってくれたし、日本語も知らないうちに身に付いた。日本語学校に通ったことはないが、日常でも商売でもことばで苦労することはほとんどなかった。

メヘラバンさんは友人のレザーさんと同様に、今では日本人の女性と結婚して家族をもっている。戒律を比較的ゆるや

かに解釈することも可能なシーア派であり、近代化の進んでいるイラン出身の彼らにとって日本での生活は、宗教的にも日常の生活でもそれほど窮屈とは感じていない。決して多くはないが日常の礼拝や禁酒、禁食慣行にもそれほどこだわらない人もいるほどだ。メヘラバンさんは逆に日本人がアメリカの政治的見方をとおして抱くイランの暗く、怖いイメージにとまどうくらいだ。庶民の生活レベルでは礼儀作法や人情では日本人と通じるところはかなりあると思う。とはいえ、状況次第では家族とイランに戻ることもありうる。そのため三歳の息子にはベルシヤ語で話し、ことはだけは身に付けさせてやりたいと思う。

かつて滞在期限切れ期間の摘発や病気の不安、安定しない生活など、ひとなみの苦労は彼にもあつたはずだ。しかし、いつもイラン人や日本人の知人のおかげでなんとかなった。切り抜けてきたという彼に、悲壮感はない。日本語を話し、永住ビザをもつ外国人に対しては日本人社会がときおり見せるよ者扱いには閉口するが、十数年のあいだに除々ではあるが、これらかなり改善されてきたという。また関西はイラン人の大量流入時代の偏見がないだけ暮らしやすいと思っている。週日は晩遅くまで工場や外まわりの仕事をしながら、土曜の夜は友人たちとちよつと羽をのばし、日曜は家族と買い物やドライブでくつろぐのが楽しみだという。

地域を世界と結び

地球時代のビジネスなどという、アタツシケースを手には、商品には手も触れずに世界の都市をとおびまわる姿を連想しがちだ。合理性を重んじるビジネスの世界では、家族やねちこい人間関係が前面にあられるのはきわめて稀である。しかしメヘラバンさんたちの仕事は、確かに世界を相手に展開しているもの、日常の舞台はあくまでローカル、家庭的で、対面主義である。都心からはなれた地で、少し前までホンコツ車として部品をとる以外ごみ扱いされてきた廃車の町を世界に直結させたのは、彼らに負うところが多い。かといって、彼らにことさら特別な気負いがあるわけでも、周囲に国際性やエスニック性を誇示するわけでもない。

一時のピークから十数年も経て、家庭を築いて定着したイラン人は、現在、日本各地に分散するが、中国やブラジル出身者やコリアンのように堅固なコミュニティも集住地ももってはいない。とはいえ、外見はもとより、仲間内で使うことばからいっても彼らの存在自体、特に地方においては周囲からは大きく際立っているのは事実だ。しかし地域の産業の一端を担い、あるいは住民としてその存在自体がすでに町の風景の一部となっているイラン人は決して少なくはないはずだ。社会の多民族化にはいくつものパターンがある。そのひとつがメヘラバンさんのような人びとによって担われて